

21世紀

はじまりはおわりの
はじまりのおわりの
はじまりのおわりの
はじま・・・




第33号

さよならからす??

発行所 東京都中野区中央5丁目1番2号西田ビル4階 〒164-0011 からす新聞本社 電話03-3382-5963 ©からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

- 二面(オラ面) 松本と話そうピンポンパン
- 三面(国際面) ヤンヒボのドイッ
- 四面(からすライブラリー) 本『キブリ大学』
- CD『ニムロツ』
- 映画『レーニー・ブルース』
- 五面(書き初面) 書き初め大会
- 七面(藝術面) レイズ・ギャラリー




猫が我が家に住むようになったことを以前ここに書いた。相も変わらず、コミュニケーションには苦しんでいる。しかたがないので、相手の顔を窺って、心中如何がなものかと慮る次第。それで何がわかるのか、というところ、よくわからない、というその一点のみ。ソクラテスのような心境である。

先方の胸のうちにはよくわからないもの、じろじる見ていれは具体的な行動は把握できる。彼女は高い所を好むようである。外では、木に登り、屋根の上を走り回る。屋内でどこに陣取るのかといえ、取り敢えずは椅子の上、物置き部屋の手が届かぬような天井すれすれの辺り、あるいは、階段を上がりきったところに積み上げられている段ボールの山の上、私の視線相当の窓枠、ピアノの上、などなどという具合。カーテン・レールの上をただただかまももある。何が楽しいのか、嬉しいのか、一日のかなり時間を地面(床)以外の空間で過ごしているのである。

考えてみると、高い所を好むのは、何も猫ばかりではない。世の中には山に登るのが好きだという者たちが、少なからず存在する。この世知辛い御世に、時間を割き、予算をやりくりし、肉体をいじめて、そんな苦しい思いをしてまで何故彼らは山に登るのか。そこに山がある

からす新聞は学習塾カラーズが母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行している新聞です。

誰でも自由に参加できます(無茶しやない範囲で)。



から」というマロリーの言葉が有名だが、実のところ、この文章が一体何を説明しているのか、私には理解できない。禅問答のようである。畢竟するに、嗜好は説明不能である、という一事を述べているのだから。

確かに、頂やそれに準する高みから臨む景色は良いだろう。空気だつてうまいのかもしれない(排気ガスの充ち満ちた都会より良いのはあまりにも当たり前はあるが)。山の上で飲む...おそろくは、ぬるい。ビールは格別だ、という輩も少なくはない。酸素が欠乏しているせいで、あるいは、疲労のせいで、味覚が麻痺しているだけなのだという可能性も否定できないが。

大方の人が想像する通り、私は山登りを好まないし、従つて、山に登つたりはしないのである。けれども、ビルの屋上にあがつたりすることもある。高い所から、自動車や単車が頻々と行き交つのを眺めるのはなかなか楽しい。季節と天候が良ければの話ではあるけれど、そこで酒が飲めればなお結構。

人が高い所を好むには、どんな理由があるのだから、そう考えているうちに、「上」という概念には特別なイメージがつきまといっている

(最終面に続く)

松本と話そう。ピン、ポン、パン

ここ、鶴沼海岸は、今年初めての積雪の進行形内にあります。

そんな中、ほんとの久方ぶりの、なんにもしなくていい、なんにも考えなくていい、夜を過ごしています。みなさんはいかがが過ごしてますか？

21世紀はここで迎えました。とても気持ちよく迎えられました。20世紀最後の日は夕方まで仕事があり、そのあと、会の誘いも断ち、急いでここに戻ってきました。最低限度の新世紀を迎える準備のために。

流し、風呂場、手洗い、この3つの水関係はどうしても清めた状態におかねば、という強迫的思いは、仕事でほとんど限界に近いまでに疲労していた精神と肉体をそれへと向かわせました。

テレビをつけたままやったのですが、どうでもいいはずの紅白が意外にも邪魔しました。特に、その夜限り再結成した、これもどうでもよかったはずのピンクレディー、アリス。完璧に画面の前に吸い寄せられました。そして視野に入るのは彼らの姿であっても、頭の中で映し出される映像は自分がちょうど中学に入る辺りのものでした。つまり吸い寄せられたのは20年以上も前の自分にだったのです。当時は熊本にいて、みなさんもそうでしょう、少しずつ大人の世界に足を踏み入れはじめる頃で、なにか勝手に何の根拠もなく将来に胸躍らせていました。ものすごい速度で色んなことに心奪われたりもしました。そしてそれが、20世紀最後の数時間に、今年35になる自分の中に暫しのあいだりバイバルしやがったのです。とても奇妙な居心地のよさを覚えました。一方、もうすっかりそういった思いをしなくなった、ちょっとした寂しさをも。

そう、そんなこんなで手間ひまかかって、ちょうど元日の12:

00、お清めはなんとか完了。そしてそのあととっさにすべての電気を消し部屋の真ん中でトランクスードで身体も清めたその流れで蓮華を組みまして、沈黙に全てをまかせました。そして可能な限りの、これまでに自分と関わりのあった人の顔を一人ずつ思い浮かべ、『おめでとう。』とささやきかけました。(そう、だからもしその時ピンポンパンのことがふとでも頭によぎった人は、それが伝わった人でしょう。)

ここに来て約4ヶ月。ですが20世紀と21世紀のブリッジの場に囚らずもなってしまう。ここから21世紀は始まることになりました。これもなにかの縁なんでしょう。

いや、素敵などですよ。浜に出るでしょ。真正面は大平洋で、左には間に江ノ島、その向こうには三浦半島、右には手前にエボシ岩がありその向こうには伊豆半島、そしてそこまですーっと白浜が弧を描いて続いており、背景には富士山がでんと構えている。そして改めて正面に目をやるとわずかながらも、しかし確実に綺麗に弧を描いている。ほぼ、毎日、浜に出ますが、同じ表情は二度とない。毎回インスパイアされます。

正月の3日、早朝6時過ぎ。東は薄くオレンジ色が青色を演出し始め、西はまだ暗闇。そんななか、波打ち際を西に向かって走りました。走れば走るほど暗闇は薄まって行く。後ろを振り返るともう完璧に江ノ島はオレンジを背に浮かび上がっている。そして再び前に目を向ける。すると、やたらにでかい、やたらに尾の長い流星がいきなり現れ、いきなり海の中へと吸い込まれて行きました。思わず、オレも一緒に連れてけよ、なんて言ってしまいました。

雪はどうなんだろう？まだ降ってるのかな？ありゃ、雨になってる。なるようになるんだろう。浜は今どんな表情でいるんだろう？見てくるか。

それではみなさん、また。

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。
あなた一人で悩まないでください。

ストーカー バスター

相談無料
秘密厳守

防犯用品販売・
防犯対策指導も
致します。

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

1843 N. Cherokee AVE: APT. #216

Los Angeles: CA 90028, USA

voice : +1-310-493-1001

facsimile : +1-323-466-5645

ヤンヒポの

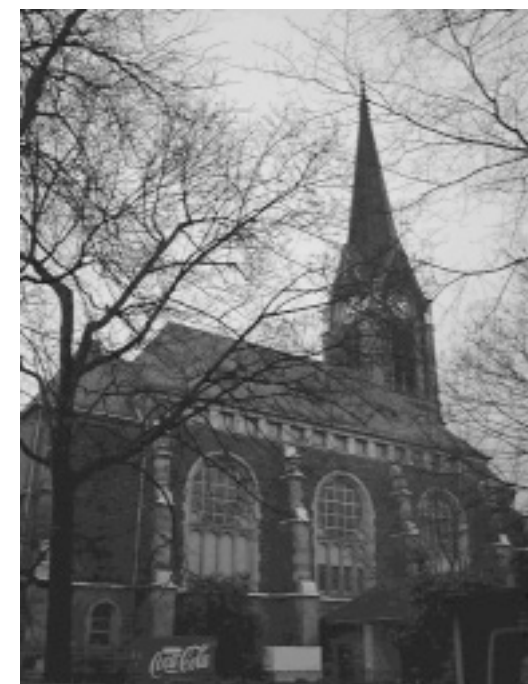
× 人気質^{かたぎ}っていえば聞こえは良いけどさあ。

障害者は程度によって等級があり上位(重度)ほど、当然ながら国からの補助を受ける。ま、身障者だからみんなで助けようって事みたい。消費納税額でいえば番付に入ってもおかしくないぐらゐの筆者としては税金の使い道を少しぐらい理解してもパチはあたらぬはずだ。それが納得できるかどうかは別^{かく}としても。

話の本筋とは全く無関係な話から入ったが、兎に角今回は本業の一つである身辺警護の為、ドイツはフランクフルトへ同行した。これが初の欧州という事もあり、仕事がらみで出かけられるのは大変都合なのだ。到着したのはフランクフルト・アム・マイン(マイン河畔のフランクフルトという意味)国際空港。欧州の冬は日照時間が極端に短い。5時半着だったが完全に暗くなっていた。予め手配を済ませていたレンタカー(今回はボルボの新型車)をひっぱり出し、兎にも角にもホテルまでたどりつかなければならぬ。米国では衛星追跡システムが発達しているののでいわゆるカーナビを希望すれば搭載車

を使用できる。それにならぬ、カーナビ搭載車を希望しておいたのだが、残念な事に欧州では衛星追跡システムが発達しておらず、簡単に期待を裏切られた。今回は仕事なのだからあまりみともないマネはできるはずも無い。対象に悟られるわけにもいかないのだ。常に平然であるかのごとく振るまい、決して不安に陥れない事。そうしないと、不安は不安を呼び悪循環となり、かならずトラブルに発展する。そんな気遣いをしていゝ余裕もなくなるほど、ドイツ語で書かれた標識を頼りにアウトバーンをひた走る。人間、追いつめられると

奇跡を呼ぶもので理屈では説明できないのだが、何故かホテルを探し当てる事ができたのだ。空港からホテルまでの移動距離は東京駅から調布



まで車で行き、調布のホテルを見つけたようなものだ。ま、火事場のクソ力って言えるのかもしれない。アドレナリンの作用は未知である。それもこれも、パッケージツアーでは味わえない醍醐味なのだ。

そんな初日を無事に終えたと後は全く怖くない。最終日には何故か、知りあゐをフランク



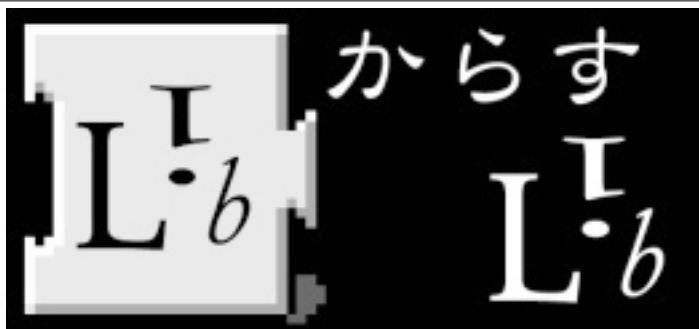
ルト観光案内するまでになった。さてさて話がそれだが、ドイツ経済の中心地、フランクフルトの町並みを見てみよう。元来、ドイツなんて全く興味の無かった筆者はドイツの中心はベルリンだと思っていた。東ドイツってものもかつては存在したわけで、てっきりベルリンが国の中心にあつて、そこを境に西と東に別れているもんだと思っていたのだ。しかし、実際はベルリンはドイツ北方にあり、旧東ドイツはほんの少しの面積しかないのだ。早い話、国土全体の約8割は西ドイツだったのだ。そんな中で、西側経済の中心がフランクフルトであり、近い将来統一される貨幣、ユーロの統括銀行もここにある。兎に角初

めの欧州紀行なのでドイツが欧州の縮図になるかどうかと比較対照できないが、やはり北米とはかなり雰囲気が違う。まず単純に歴史、古くから残っている建物が大変目に付く。次号でも紹介するが、ケルンという町にある聖堂は1200年代に着工して完成したのが1800年代。実に600年かけて完成した建造物なのだ。米国は建国200年たらず。この違いは歴然なのだ。そして、もう一つ重要な違いは日本と等しく、第二次大戦下で空襲にあゐ、一度は廃虚と化している。さらに興味をひいたのは現地で見ただけではがきによると、米軍が京都を爆撃しなかったのと同様に歴史的建造物は破壊しなかったのだ。フランクフルトにも多数の歴史的遺産となる教会などの建造物がかなりある。それらだけを残して、後は瓦礫の山となっている絵は不思議としか言いようがない。当時から爆撃の精度については大したものようだ。まかり間違ってもイエスキリストが守った訳ではないだろう。

ここで、さらに前置きに付け加えるが先にも書いたがフランクフルト・アム・マインという名前の由来として、ドイツにはもう一つフランクフルトという町があり、そちらと区別するという側面と、欧州、特にドイツは海と接していないので、有名なライン川を始め、川との結びつきが重要なポイントになる。マイン川もフランクフルトを抜けた先でライン川に合流しているのは言うまでも無い。

なにか、前置きだけで紙面が埋まってしまったようだが、実際の風情は次号以降で紹介する事にする。

(不適切な表現がありましたので、一部伏せ字を施しました。
...からす新聞編集部)



『ゴキブリ大全』

デヴィッド・ジョージ・ゴードン

松浦俊輔訳)

青土社、1999年 ISBN4-7917-5701-7 C0000



いずれ人類は滅びるのだろうか。周囲を見渡してみたり、歴史をひもといてみたりする限りでは、可能性は極めて高そうである。その時に生き残っているものは何かと考えると、ゴキブリしか思い浮かばない。彼らに地球の未来を託すことにしよう。もっとも、こんな考え方自体、彼らにしてみれば「何を失礼な」と文句のひとつも言いたくなるような文句に響くかもしれない。三億年以上も前から彼らはこの星にいるのだから。つい最近出現したヒトなどというものに、地球の未来を語ってもらいたくはないぞ、と。

タイトルにも触れておこう。たいぜんcomplete という古い言葉が使われている。かんぜんcompleteにたべるeat、食欲旺盛な彼らにぴったりの名まえではないか。

ゴキブリが嫌いな人も好きな人も、この驚異的な先住者の生態にもう少し関心を持ってもいいのではないか。

(全太)



『nimrod』 Green Day

REPRISE、1997年、WPCR-1601



このアルバムが発売されたのは、確か3年ぐらい前だった。グリーン・デイっていうバンドは今でこそ3人で定着しているが、グリーン・デイの母体となるスイート・チルドレンを結成した当初は4人編成だった。当時のメンバーは、ギターのマイクとピリー、ベースのショーン、ドラムのジミーで、友人の家のガレージやピリーの家の居間でプレイしていた。ある日ベースのショーンの家の裏庭でプレイしていたら、そのショーンが歯医者に行かなくてはいけないことで、「いいからこのままやってろよ」「おし、わかった」なんて言って、マイクがベースを弾いて3人でしばらく演ってみたら、マイクの方がよっぽどうまくいっちゃってそのまんま3人になった、という。で、ドラムも何度か変わって、今のピリー(G) マイク(B) トレ(Dr)になった。

このアルバムは、僕がグリーン・デイを聞ききっかけとなったアルバムでもあり、かなり気に入っている、ランシドとかゴツゴツしたパンクを聞く人も、たまにはこういうのを聞いてみてはどうだろうか。(桑原 裕之)



レニー・ブルース (Lenny)



1974年公開(アメリカ)

ビデオ:ワーナーホームビデオ

製作:マービン・ウォース

監督:ボブ・フォッシー

脚本:ジュリアン・パリ

出演:ダスティン・ホフマン、ヴァレリー・ベリン、ジャン・マイナー

レニー・ブルースは、1950~60年代のアメリカで人気を博したはく実在のスタンダップ・コメディアン。彼は、「良識」の偽善性に言葉で挑み、政治から性的問題まで、激しい言葉で笑いにした。この映画はレニーが駆け出しのコメディアンだった頃から始まり、若くして自殺を遂げるまでを描いたもの。

毒舌の芸人というのはアメリカに限らず、どこの国にも必ずいるものだが、その毒舌が「彼の芸は人間社会を鋭く風刺し、我々に人間の真の姿を見せつける」といったふうに評価されて、だんだん「偉く」なってしまう芸人が少なくない。しかし、本物の毒舌芸人とは、おそらく使命感などとは無縁であり、そうしていなくては生きていけない精神の持ち主だ。もちろんプロフェッショナルな芸人であるから、話術も磨

かなければならないし、計算された芸を見せていかなければならない。それでも、精神の根底において、毒舌であり続けなければ生きられず、決して偉くはならない芸人というのはきつといて、レニーはその1人だろう。

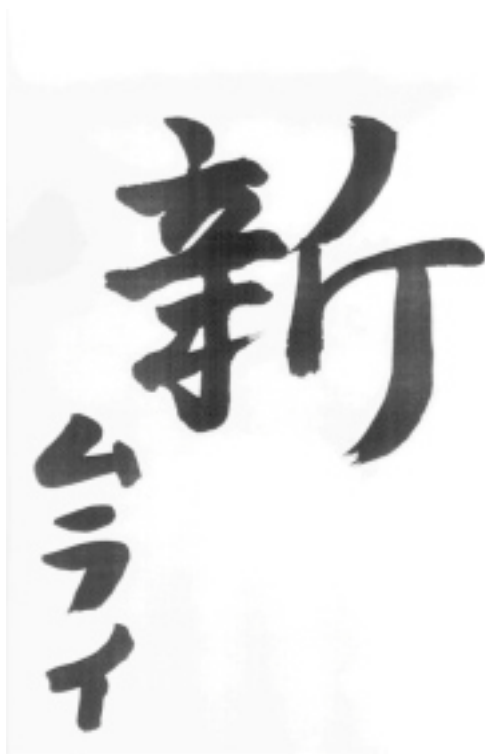
レニーは公共の場で卑猥な言葉を使ったとして風紀紊乱罪で何度も逮捕される。麻薬とも縁が切れない。そして、最後は自殺してしまう。「良識」で生きている人から見れば、レニーは反社会的で、忌み嫌うべき存在だろう。

全てのものが妙に清潔で、健全性を装っている今日の社会において、レニーのような芸人は存在するのだろうか。仮に存在していたとしても、そうした芸人は名も知れず、消えていくことだろう。今日では、本当に毒のある芸は社会的に抹殺されてしまうから。でも、レニーのいない世界は正常ではない。人間という存在にはダークサイドが無いのごとく振る舞うのが正しいとされている(あるいは、ダークサイドに触れたように見せかけているつまらない芸人がびこっている)今日、弾圧された言葉を解き放つレニーを待望する人も実は少なくないのではない

(りんご)



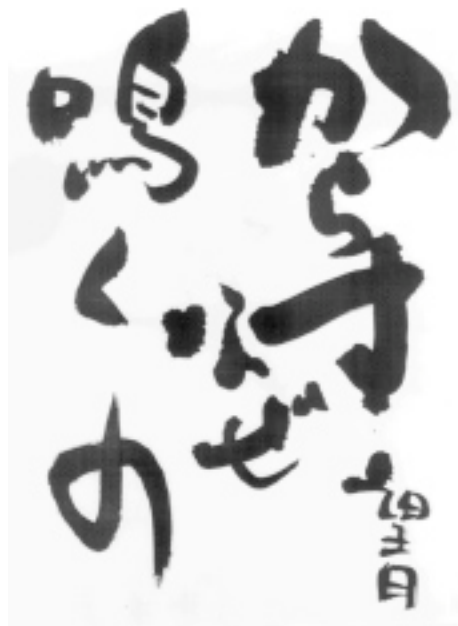
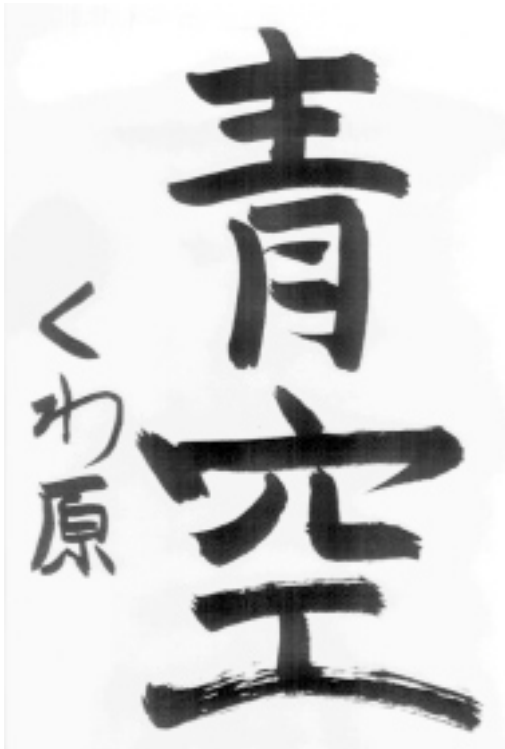
書き初め



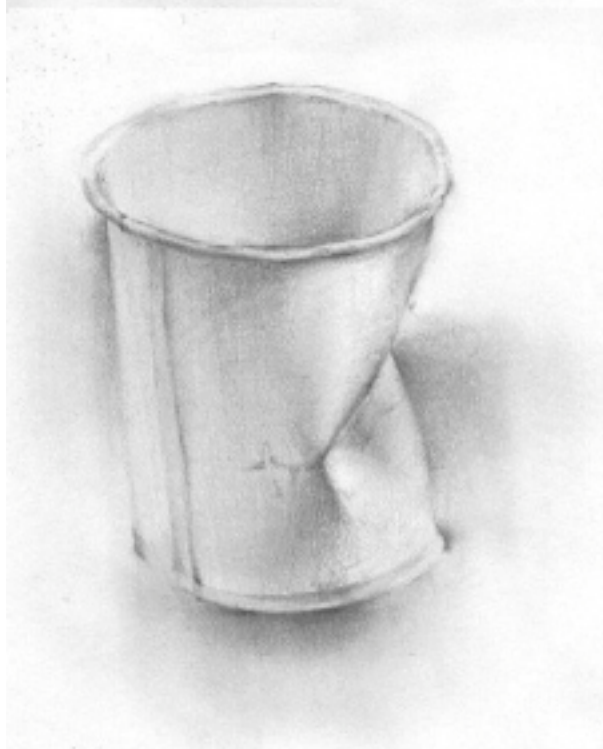
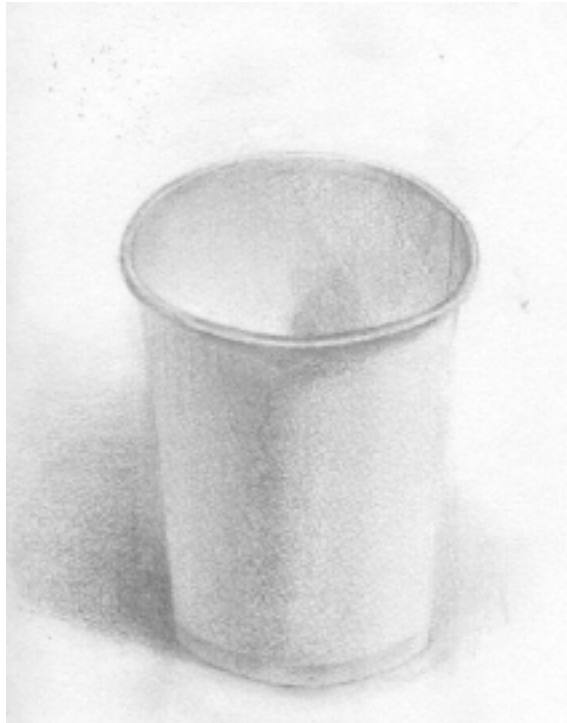
新春



森田 晃大



Rei's Gallery



変型

ありがとう

原点シミュレーション復刻

かつて私が連載していたシリーズを、新世紀の幕開けにちなんでちょっとだけ復活させてみます。

本シリーズの主旨は、語学とは英語を学ぶのみにあらず、ということでした。英語は今や、確かに世界共通語の地位にあります。でも、だからといって世界中どこに行ってもいきなり英語で話しかけるっていうのは無礼だと思う(例: けっこう多くのアメリカ人)。挨拶ぐらゐは、その国の言葉ですべきだ。それが原点だ。私たちだって、

“Excuse me?”

と言って道を聞かれるより、

“Su-mi-ma-se-n?”

の方が好感を持って教えてやろうというものではないでしょうか。

シベリア経由でヨーロッパを漂流後、「僕」はいま、新世紀の到来を控えてイギリスの首都、ロンドンにいます。今回は、原点中の原点、感謝の気持ちを表す「ありがとう」のいろいろを、再び学び直してみましよう。(望月)

.....

ロンドンでは、運良くいい下宿が見つかった。おばはんのウエンディは、日常的に早口で喋るために言ってることがほとんどわからないことを除けば、とってもしい家主さんである。ウエンディは、置いてやるのは若い男の子だけ、と決めている。

きょうは新世紀目前の大晦日、New Century's Eve。同じ下宿人のイタリア人、マルコが街にカウントダウンに出かけないか、と誘ってきたんで、やはり同宿人のフランス人 Xavier、それからドイツ人のデトレフとも連れだって繰り出すことにした。

.....

僕の知っているイタリア人は、偏っていたんだろうか、どいつもこいつも日本人をガールフレンドにしていた。

エドゥアルドにはマキコ。クラウディオはクミ。アルベルトの彼女は、えっと、なんだっけ、なんでもいいや。

日本人の女の子は、総じてヨーロッパ人に評判が高いのであった。どうやら、自己主張を抑えたところがいいらしい。生意気じゃないというか、従順というか。

いつのことだったか、アントニオと別れたアコは、怒り狂いつつ、「あいつらが好きなのは、できあがった『日本の女らしさ』の評判だけ！中身は関係ないの！」

それから、こんなことも付け加えていた。

「くそっ、もうちょっとで EU パスポートが手に入ったのに」

注: EU(ヨーロッパ連合)に加わってる国の人と結婚すれば、自動的に私たち日本人でも EU 市民になれるのです。

グラーツィエ。(Grazie.)

なるほど、そんなもんか。異国に来て知る、母国女性の妙。僕も、もっと女を見る目をみががなくちゃ。君たちの啓蒙に感謝して、イタリア語で「ありがとう」。

.....

マルコのガールフレンドは、スペイン人だった。途中、ペーカーストリート駅から合流したのはマルコのガールフレンド、シルビア。出身は、大西洋西アフリカ沖に浮かぶスペイン領、カナリア諸島だという。なかなかの美人だが、声が、どっから出てるんだろう、裏返っている。

地下鉄車内に入るなり、シルビアがおもむろに煙草を取り出し、何食わぬ顔で口にくわえる。マルコがやはり、何食わぬ顔ですぐにそれを取り上げる。

“It's not allowed(いけないの?)”

と、裏返った声。

“No.(ああ)”

と優しいマルコ。

“O.K.”

なんだそうなのか、といった表情で彼女はふつうに煙草をしまうのだった。ちなみに彼女は、ロンドンに来て少なくともひと月はたっている。

グラシアス。(Gracias.)

カナリア諸島は、南洋上のリゾート地だというのが、そんな楽園からそのまま飛び出てきたようなシルビア。ただの阿呆か、それとも天使なのか。むずかしい問題だ。そんな宿題に、スペイン語で「ありがとう」。

あとになって別のスペイン人の友だちと飲みながら、このことを話してみた。すると、スペイン本土出のヘサスは、こう言った。

「カナリアの女には、そういうの、多いね。たいていは、スチューピッドよ、スチューピッド。でも、すっげえいい女が多いんだぜ。俺も付き合ったことあるけどさ。まあ、よきカナリア人(good Canarian)ってとこだな」

聖書の、たぶん『マルコによる』じゃなくて『ルカによる福音書』には、誰にでも分け隔てなく救いの手を差し伸べる「よきサマリア人(good Samaritan)」のことが語られている。なるほど、確かに、閉店時間を過ぎたパブに居座ろうとして追い出されるさまは、お前こそスチューピッドではないか。そんなヘサスの彼女になってやろうなんて女は、天使かもしれない。

ちなみに、ヘサスの綴りは Jesus、英語読みはジーザス(・クライスト)、日本語読みではイエス(・キリスト)であった。

.....

チェアリングクロス駅を出ると、すぐにトラファルガー・スクウェアだ。新世紀に向けたカウントダウンに合わせて、続々と若者たちが集まってくる。僕たちも、まずは適当なパブに入ってその時を待った。

ここで一つ問題。「僕」の連れのフランス人の名は“Xavier”ですが、さて、この名前、何と読むでしょう。ちなみに、英語では「ゼイヴィア」と発音します。

フランス人のザビエは、だいたい飲むと調子がいいんだが、今晚はとくに行っちゃってるなあ。

そうこうしているうちに、その時間が近づいたので、ビール片手に表に出て待機。

..... Three, two, one, A HAPPY NEW CENTURY!!

うおお

一斉の歓声。

ぶ、無礼講だ！みんな相手がまわらず抱きあってる。抱きつかれる。ほっぺにチューされる。耳にチューされる。鼻にチューされる。くちびるにチューされる。ん？おい、こら、離れる、お前、ザビエだな、おいっ。

メルスイ。(Merci.)

ザビエとはあの、フランシスコ・ザビエルと同じ名前である。いきなり人の国に踏み込んで来て、頼みもしない布教活動させてくれとダダをこねたのが16世紀のザビエル。

歴史は繰り返すというのか。ザビエよ、君にキスしてくれと、僕は頼んだわけではない。しかし、その味を、僕は忘れることができない。とりあえず、稀有な体験を「ありがとう」と言っておくけど、もういいよ。あれで十分だから。

.....

「12時過ぎたから、俺はもう帰る。面白かったよ。ダンケ(Danke)」すべてのドイツ人が、あのようではないだろうが、デトレフはいつものとおり、礼儀正しく「ありがとう」を言い、時間厳守で家路についたのであった...

といつことに思い当たった。(一面から続く)

天国は「上」にあり、地獄は「下」にある。一般に数字は大きい方向に進む場合に「上」と考えるのだが、「上」がると表現する。「順位が上がった」というような具合。「上」には「上」がある。「上を見たら限りが無い」などという慣用表現を誰もが耳にしたことがあるはずだし、「御上」や「上様」といえば、我々の如き「下々」のものは恐れ敬わねばならないほど偉い存在であるらしい。天は人の「上」に人を作らず人の「下」にも人を作らなかつたらしいのに、現実には力関係に応じて人を見「下」したり見「上」げたりすることも屢々。

このように「上」は「良い」「偉い」という言外の意味を持つ。逆もまた真なりで、「下」は往々にして好ましくないからざる場面に用いられることが多い。こういう感覚が世界の隅々に

おいてまで支配的であるか否か、知る由もない。けれども、少なくとも、私が多少なりとも親しんでいる文化圏では、この「上」「良」というイメージは標準的であるように思われる。

では、この感覚は、一体どこからやってきたのだろうか。思考を司る頭が「上」にあるからか。「上」にいれば外敵から身を守りやすかつたからだろうか。確かに、「上」にいれば安全だという情報がDNAに刷り込まれているという可能性はあるだろう。

そんなことを思い巡らしながら、ふと窓の外を眺めた。東京の汚れた空にも星がちりりほらり。空、星、月、雲、太陽。この手が届かないものたち。なるほど、手が届かないからこそ、人は「上」をありがたいもののように思うのかも知れない。そんな夜の夜、猫は椅子の上で眠っている。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

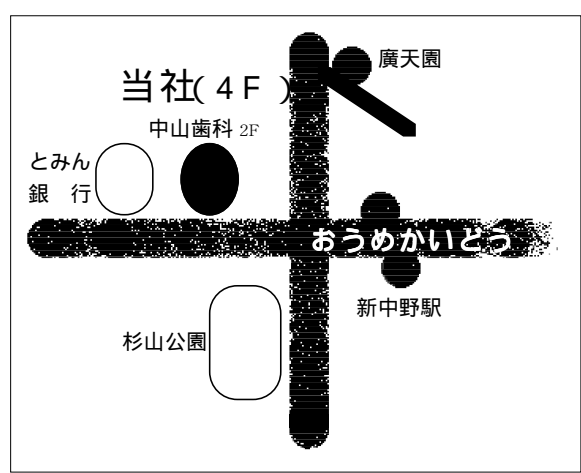
4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,
Tokyo 166-0015,
Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>



来社見学を御希望の方は左記のところへ。
丸ノ内線新中野駅徒歩〇分

編集後記
からす新聞第三三三号、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発刊予定日は二〇〇一年二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451